史料①

1 百余国 ★★★★

夫れ楽浪海中に倭人[2]有り。分れて百余国をなす。[1]歳時を以て来り献見[3]すと云ふ。（『漢書』地理志）

❖通釈❖❖❖❖❖❖❖❖

楽浪郡の海の向うには、倭人がいて、百余の小国に分かれている。そして定期的に貢物をもってお目にかかりに来るということだ。

小国統合への動き

1 建武中元二年　西暦五七年
2 奴国 重要　九州北部の博多湾あたりと考えられる→不弥国
3 大夫　大臣
4 印綬　印章とそれを身につける組みひも
5 安帝の永初元年　西暦一〇七年
6 生口　奴隷、捕虜などと考えられる
7 請見　安帝にお目にかかる
8 桓・霊　後漢の桓帝・霊帝の時代、二世紀後半

2 小国統合への動き ★★★★★

建武中元二年[1]、倭の奴国[2]、奉貢朝賀す。使人[1]自ら大夫[3]と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬[4]を以てす。

安帝の永初元年[5]、倭の国王帥升等、生口[6]百六十人を献じ、請見[7]を願ふ。

桓・霊[8]の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主無し。（『後漢書』東夷伝）

❖通釈❖❖❖❖❖❖❖❖

建武中元二（五七）年、倭の奴国が、朝貢してきた。その使いは自分のことを大夫と称した。奴国は倭の最南端にある。光武帝はこの奴国王に印綬を授けた。

安帝の永初元（一〇七）年には、倭の国王帥升らが、百六十人の奴隷を献上し、お目にかかりたいと願い出た。……桓帝と霊帝の時代（二世紀後半）、倭の国内が大いに乱れ、たがいに争い、長い間、統一されなかった。

1 邪馬台国と卑弥呼 ★★★★★

(1) 道程

倭人は帯方[1]の東南大海の中にあり、山島に依りて国邑をなす。旧百余国。漢の時朝見する者あり。今、使訳通ずる所[2]三十国。……郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓国を歴て、乍は南し乍は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里。始めて一海を度る千余里、対馬国に至る。……また南一海を渡る千余里、名づけて瀚海といふ。一大国に至る。……また一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。……東南陸行五百里にして、伊都国に到る。……世々王あるも、皆女王国に統属す。郡使[3]の往来常に駐まる所なり。東南奴国に至る百里。……東行不弥国に至る百里。……南、投馬国に至る水行二十日。……南、邪馬壹国[4]に至る。女王の都する所、水行十日陸行一月、……七万余戸ばかり。……その南に狗奴国あり、

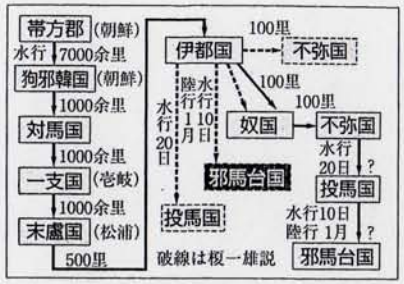
❖通釈❖❖❖❖❖❖❖❖

倭人は帯方郡の東南方の大海の中にある山がちな島に邑や国をつくっている。もと百余国に分かれ、漢の時に朝貢するものもあった。現在使いを遣わして来るものは三十国である。

帯方郡から倭国に行くには、海岸ぞいを航海し、韓国を経て、あるいは南の方へ、あるいは東の方へいって、狗邪韓国につくまで七千里ほどある。はじめて海を千里ほど渡ると対馬につく。……また、南へ千里ほど海を渡るが、この海を瀚海という。一大国（壱岐）につく。……また、海を千里ほど渡ると、末盧国（松浦）につく。ここの戸数は四千戸ほどである。……東南へ陸を五百里いくと、伊都国につく。……代々王がいるが、皆、女王国（邪馬台〈壹〉国）に服属している。帯方郡からの使者が邪馬台（壹）国と帯方郡を往復するとき、かならず立ち寄るところである。東南へ百里いくと、奴国につく。……東へ百里いくと、不弥国につく。……南へ船で二十日いくと、投馬国につく。……南へ船で十日、さらに（あるいは）陸を一か月いくと、邪馬台（壹）国につく。女王が都

邪馬台国と卑弥呼

(1) 道程

1 帯方 重要　後漢末、楽浪郡の南に新設した郡
2 使訳通ずる　中国に使節を送る
3 郡使　帯方郡からの使者
4 邪馬壹国 重要　『後漢書』には邪馬臺（台）とあり、壹は臺の誤りとする説が有力だが、邪馬壹国とする説もある

邪馬台国への里程